

令和七年度
松山短期大学一般選抜試験

国語

令和七年三月四日 実施

解答はすべて解答用紙に記入し、
解答用紙のみ提出すること。

問一．次の各設問に答えよ。

1. 次の(一)～(五)の言葉を漢字四文字で作られた熟語(四字熟語)に直せ。

- (一) しょうしんしょうめい
- (二) しょうすうせいえい
- (三) しりめつれつ
- (四) しんきいつてん
- (五) しょぎょうむじょう

2. 次の(一)～(五)の四字熟語の読みをひらがなで記せ。

- (一) 一期一会
- (二) 大言壮語
- (三) 金科玉条
- (四) 頭寒足熱
- (五) 一念発起

3. 次の(一)～(五)の語に対して意味の最も類似した語を【 】の中からそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- | | |
|-----------|-------------------------|
| (一) 観点 | 【 ①見識 ②見解 ③見地 】 |
| (二) 経緯 | 【 ①工程 ②過程 ③路程 】 |
| (三) 苦心 | 【 ①腐心 ②用心 ③改心 】 |
| (四) すかさず | 【 ①すぐに ②しだいに ③たしかに 】 |
| (五) もどかしい | 【 ①歯がゆい ②ややこしい ③あどけない 】 |

4. 次の(一)～(五)の言葉の意味として最も適当なものを【 】の中からそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

(一) 「失笑する」

- 【 ①笑いも出ないくらいあきれる ②相手を見下したように笑う 】

(二) 「手をこまねく」

- 【 ①何もせずに傍観している ②準備して待ち構える ③うまく処理できずに困っている 】

(三) 「涼しい顔をする」

- 【 ①夏の暑さに強い様子 ②大変な状況でも平気そうにする ③関係があるのに知らんぷりする 】

(四) 「雨模様」

- 【 ①雨が降りそうな空の様子 ②雨が降っている空の様子 ③小雨が降ったりやんだりしている空の様子 】

(五) 「流れに棹さす」

- 【 ①流れにさからうこと ②流れに乗って、すいすい進むこと ③流れをせきとめること 】

問二・次の文章を読み、設問に答えよ。

人間には、グライダー能力と飛行機能力とがある。受動的に知識を得るのが前者、自分でものごとを発明、発見するのが後者である。両者はひとりの人間の中に同居している。グライダー能力をまったく欠いていては、基本的知識すら習得できない。何も知らないで、⁽¹⁾ ドクリヨクで飛ぼうとすれば、どんな事故になるかわからない。

しかし、現実には、グライダー能力が圧倒的で、飛行機能力はまるでなし、という「優秀な」人間がたくさんいることもたしかで、しかも、そういう人も「翔^とべる」という評価を受けているのである。

学校はグライダー人間をつくるには適しているが、飛行機人間を育てる努力はほんのすこししかしていない。学校教育が⁽²⁾ セイビされてきたということは、ますますグライダー人間をふやす結果になった。お互いに似たようなグライダー人間になると、グライダーの欠点を忘れてしまう。知的、知的と言っていれば、翔^とんでいるように⁽³⁾ サツカクする。

われわれは、花を見て、枝葉を見ない。かりに枝葉は見ても、幹には目を向けない。まして根のことは考えようもしない。とかく花という結果のみに目をうばわれて、根幹に思い及ばない。

聞くとところによると、植物は地上に見えている部分と地下にかくれた根とは形もほぼ同形でシンメトリーをなしているという。花が咲くのも地下の大きな組織があるからこそだ。

知識も人間という木の咲かせた花である。美しいからといって花だけを切ってきて、花瓶にさしておいても、すぐ散ってしまう。花が自分のものになったのでないことはこれひとつ見てもわかる。

明治以来、日本の知識人は欧米で咲いた花をせっせととり入れてきた。中には根まわしをして、根ごと移そうとした試みもないではなかったが、多くは花の咲いている枝を切ってもつてきたにすぎない。これでは^(a) こちらで同じ花を咲かせることは難しい。翻訳文化が不毛であると言われなくてはならなかったわけである。

根のことを考えるべきだった。それを怠っては自前の花を咲かすことは不可能である。もっとも、これまでは、切り花をもってきた方が便利だったのかもしれない。それなら、グライダー人間の方が重宝である。命じられるままについて行きさえすれば知識人になった。へたに自発力があるのは厄介である。

指導者がいて、目標がはっきりしているところではグライダー能力が高く評価されるけれども、新しい文化の創造には飛行機能力が不可欠である。それを学校教育はむしろ⁽⁴⁾ ヨクアツしてきた。急にそれをのばそうとすれば、さまざまな困難がともなう。

他方、現代は情報の社会である。グライダー人間をすっかりやめてしまうわけにも行かない。それなら、^(b) グライダーにエンジンを搭載するにはどうしたらいいのか。学校も社会も

それを考える必要がある。

（外山 滋比古『新版 思考の整理学』による。ただし、本文の一部を改変した。）

設問

（一）傍線部分（１）～（４）を漢字に改めよ。

（二）傍線部分(a)「こちらで同じ花を咲かせること」とは、どのようなことか。わかりやすく説明せよ。

（三）傍線部分(b)「グライダーにエンジンを搭載する」とは、どのようなことか。本文中の語句を用いて説明せよ。

問三・次の文章を読み、設問に答えよ。

年に2回、直木賞や芥川賞の受賞者が発表されますが、その受賞会見はテレビや新聞などで大々的に報道されます。その様子を見てみると、時々、土中(a)のモグラが急に太陽の下に出てきた時のような、そんな姿を思い出すことがあります。大変、失礼な表現ですが、決してネガティブな意味で言っているわけではありません。

普段テレビで見ている人たちの多くは、人前での立ち居振る舞いも自然で、見られることに抵抗がないように思えます。自らタレントになろうというのだから、それはそうなのでしょう。一方、世の中には当然そうでない人もいます。私は職業柄、人前で話をする機会は多いのですが、実はもう圧倒的にモグラ派人間です。スポットライトのようなものが、とても苦手です。

私もこうして本など書いているので物書きの端くれということになるのですが、文章を書くという作業の良い所は、一人である、ということです。誰に会わなくとも、他人との意見調整も必要なく、基本的には自分だけで作業が完結します。こういった他人とのつながりが切れた、独立性と言えばよいのか、ある種の孤独と言えばよいのかわかりませんが、そういうものが文章を紡ぎだすことに必要な要素として存在しているのではないかと、時々思います。自分を直木賞や芥川賞の受賞作家と並べて語るのも大いにはばか憚られますが、受賞会見で時々見るあの「モグラ感」には、なにかそのような要素を感じ、親近感を持つてしまうのです。

自分の言葉を紡ぐということ

人間は社会的な動物で、どんな人も自分以外の人間とのつながりの中で生きています。みんなと同じユニフォームを着たり、同じ色の鉢巻きをしたり、そういった皆が同じことをすることで得られる一体感には、どこか気持ちを高揚させてくれる所があります。いろんな人と知り合いになれば、情報も多く入ってくるし、視野も広くなり世界が広がります。現代社会は情報社会であり、情報弱者は社会的弱者です。実際、他とつながり、より多くの情報を持てば、いろんな選択や判断に有利なことは多いでしょう。「モグラ感」なんて、一体、何に必要なのでしょうか？

しかし、です。極端な言い方になっているかもしれませんが、人は何かを知ってしまうと、知らない状態にはもう戻れません。それは「アナドれない真実です。他人と共有する情報が増えていけばいくほど、自分の感性や考え方がそういった「常識」に感化されるようなことが起こります。また、何かの集団とのつながりが密になれば、周囲との関係で自分の行動が制約されることも起こります。たとえば新型コロナ対策のマスク着用義務も解除となり、もう外に出る時にはマスクをしなくてもいいはずですが、周囲がみんなマスクをしていると、していない自分がどこことなく居心地悪く感じてしまいます。日本は A が他国に比べ

て高いと言われていますが、こういった右へ倣え的な行動が「つながり」の中では重視されてしまうのです。

世の中には、私も含めて、そういったものにうまくなじめない人がいます。みんなの考えになじめない。みんながすることにくまなく同調できない。だから「モグラ」的になっていく。しかし、それは本当に良くないことなのでしょう。いくら同じように振る舞ってみても、実際にはみんなが同じであるはずはありません。なになじめない、本当はそれで良いのではないかと思うのです。それがその人固有の感性であり、個性です。そこに他の誰にも書けない、あなただけの文章が生まれる可能性が眠っているのです。文章を書くという行為は、もちろん外からのインプットも必要ですが、より大切なことは自分の内部で何かを作り上げる作業です。それは作曲家が自分だけのメロディーを生み出すように、人まねではなく、どこかで聞いた話をつぎはぎするのでもなく、自分の言葉で、何かを紡いでいく作業です。そこでは他から独立した時間や精神のようなものが何より大切で、いつそ土中にもぐって日光や新鮮な空気からも遮断されたような時空間が、その作業には適しているのかもしれない。だから隠しても隠しても「モグラ感」が出てきてしまうのです（……ような気がします）。

ハンス・ヨナスの生命観

SNSやなんやで「つながり」とか「絆」^{きずな}がもてはやされる時代ですが、^(b)他から「独立している」という要素は実はとても大切なものです。付度^{そんたく}とか、空気を読むというような振る舞いは、日本社会では常識となっていて、周到的な根回しをして波風を立てず事を進めて行くのが日本の文化です。しかし、「つながり」を持った集団は良くも悪くも同じ論理や価値観を共有しています。そういった内輪だけで物事が決まると、しばしばそれは「暴走」のようなことを引き起こします。それは車で言えば、アクセルしかついていないような状態になるからです。中学生の時だったか社会の教科書を読むと、戦前にできた「大政翼賛会」に関してネガティブに書かれていて、みんなが賛成して協力しようというもののどこに問題があるのか？ と不思議に思った覚えがあります。それは結局、第二次世界大戦、そして敗戦へと日本を導くものになるのですが、そういったファシズム的なものに異を唱える存在、つまり異なった価値観でものを言える存在がない社会になってしまったことが問題だったのです。

少し話は変わりますが、ドイツ生まれの哲学者ハンス・ヨナスが提唱していた生命観は独特で、この文脈で興味深いものです。ヨナスは細胞膜を通して物質が出入りする代謝、すなわち必要なものを環境から取り入れ老廃物を排泄^{せつ}することで、膜の内部に「特有の空間」

を保持できることが、生命の本質と考えました。生命の代謝起源説と呼ばれるものです。そのような代謝を可能とする膜を持つことにより、周囲の環境に依存して⁽²⁾ **ゾウシヨク**していた状態から、その適した環境を膜の中に作り自由に移動することが可能な存在になったとしました。つまり膜により生命は「自由」を手に入れましたが、同時に膜が破壊されることで訪れる「死」の宿命も背負うようになったと提唱したのです。この膜という境界により内部と外部を分けることで「生」を定義するシンプルな概念モデルは、生物の細胞だけでなくさまざまな事象に適用が可能です。内部環境が外部と異なった状態で維持されている状態が「生」、内外の区別がなくなれば、それは「死」です。

つまりこの生命の概念に基づけば、より大きな集団の価値観の中に同化することは、その人の個性の「死」を意味します。ファシズムのような熱狂はそういった「屍」^{しかばね}を次々と吸収して巨大化していくモンスターのようなのかもしれません^(c)。何かを創作する者にとってもそういった「境界」の崩壊は、まさにクリエーターとしての「死」であり、それによって自己内側の密度を保たなくてはなりません。それが独立しているということなのです。

「独立していること」の大切さ

だから「独立している」ことは、「敵対する」とことと根本的に違います。単にその対象とは異なった論理や価値観といった、違う内容物で内部が満たされているということです。外界の環境と無関係に、特有の「自己」に忠実でいられるということなのです。人間社会においては、そういった独立したものの存在が、物事の健全な発展や改善のために、実はとても重要です。価値観を共有した集団内であれば合意は簡単で、確かに物事はスムーズに進みます。しかし、人間がやることには誤りがつきもので、違う価値観で動いているものからの指摘がなければ、それに気づけないことも多々あります。そういった自分たちと違う価値観からの指摘を入れて修正を繰り返すことで、物事は少しずつ発展、進歩していきます。

この観点で見れば、昨今、世の中全体が異論に対して狭量になっているように感じます。ネット上の論争などでは、嘘^{うそ}でもデマでも相手の揚げ足をとってでも、なりふり構わず「はい、論破！」と見かけ上、言えれば勝ちみたいな⁽³⁾ **フウチヨウ**が蔓延^{まん}し過ぎています。自分とは違う価値観を持った相手の言い分から有益なものを引き出そうという姿勢ではなく、ただ勝ち負けみたいな話（それも見かけ上の）になってしまっています。本当に大切なのは勝ち負けではなく、より良くしていくことです。

政治の世界も似た話になっているように見えます。本来与党と野党は敵ではなく、野党は与党から独立した存在として、与党の案を補うようにアイディアを出し、お互い協力して国政を良くしていくべき存在です。しかし、権力者が自分に従う味方と、批判する敵という二

分法を適用し、味方は理不尽なほど厚遇し、敵にはどんなことをしても、言ってもよいという姿勢で臨んでいるように映ります。権力者のそういった狭量な公権力の行使は、自分と同質なものしか存在を許さないという社会に対するメッセージとなっています。また、味方を理不尽に厚遇する権力者の周囲には、おべっかや忖度が得意で、得ができればあとはどうでもいいような人間ばかりが集まり、何かの時に諫言^{かん}できる志を持った有能な人間は離れていってしまいます。それは国として最も不幸な状態です。今の日本はそれに近づきつつあるのではないか、そのことを憂えます。

そう、だから時代は「モグラ」です。忖度も空気を読むこともない「モグラ」たちが土中から顔を出し、一斉に蜂起しなければなりません。それはなんだか社会が全体主義的になり、中国に与^{くみ}する奴は非国民みたいな変な空気に、「隣近所と仲良くしなくて、どうすんの？」と、ごくごく普通のことを言ってやるようなことです。それが「モグラ」の心意気です。

(中屋敷 均『わからない世界と向き合うために』による。ただし、本文の一部を改変した。)

設問

(一) 傍線部分(1)～(3)を漢字に改めよ。

(二) 空所 A に入る漢字四文字の語を記せ。

(三) 傍線部分(a)について、直木賞や芥川賞の受賞会見の様子を筆者が見て、「土中のモグラが急に太陽の下に出てきた時のような、そんな姿を思い出すこと」があるのはなぜか。その理由を本文中の語句を用いて説明せよ。

(四) 傍線部分(b)について、「他から『独立している』という要素は実はとても大切なものであるのはなぜか。その理由を本文中の語句を用いて説明せよ。

(五) 傍線部分(c)について、「クリエイターとしての『死』を意味する「そういった『境界』の崩壊」とは、どのような状態のことか。本文中の語句を用いてわかりやすく説明せよ。